

認知症の人と社会をつなげる・前田隆行さん

100BLG株式会社・代表取締役

2023年8月26日 朝日新聞・フロントランナー

(文・佐藤陽 写真・伊ヶ崎忍)

認知症デイサービスのイメージを180度覆した人だ。
全員で施設に座り決められたことをする光景を想像する人が多いかもしれないが、この人の運営するデイサービスは違う。認知症の人が働き、社会とつながるのだ。「社会参加型デイサービス」と呼ばれる。

東京都町田市にあるデイサービス「BLG町田」。6月中旬に訪ねた。



「BLG町田」の朝ミーティングに交じる。メンバー(利用者)の中にも自然に溶け込む。「BLG」は、「Barriers(障害)」「Life(生活)」「Gathering(集う場)」の頭文字をとった＝東京都町田市

午前10時すぎ。ここでは利用者のことを「メンバー」と呼ぶ。スタッフがメンバー13人に、何をしたいか、聞いていく。近くの「陽(ひ)だまりカフェ」の掃除や花屋の手伝い、ホンダ販売店の展示車の洗車、地元情報誌のポスティングなどに分かれていった。

2019年から、BLG町田と同様の介護事業所を全国に100カ所つくろうと「100BLG株式会社」を立ち上げ、育てている。現在、準備中を含め全国に18カ所のBLGが生まれた。こうした社会参加型デイサービスの取り組みは注目され、国内外から1300件を超える視察を受けた。130近い企業や団体と提携する。

ここまで来るのには、紆余曲折があった。25歳で、デイサービスの管理者に。あるとき、そこに若年性認知症の50代の男性がやってきた。「働きたい」という。そこで古民家の修繕を一緒にやった。ほかの利用者も喜んで参加した。そして、つながりのあった保育園の営繕をするようになった。

今度はある利用者が「対価がほしい」と言い始めた。だが当時の介護保険制度のもとでは、対価を得ることは想定されていなかった。厚生労働省に交渉に行ったが、認められない。

「働いたんだから対価をもらうのは、当然じゃないですか」。利用者とともに霞が関に何度も出向いた。だが、答えは「ノー」だった。5年間、通い続けた。そして11年4月、有償ボランティアを認める通知が出た。

通知を受け、仲間とともに「NPO法人町田市つながりの開(かい)」を立ち上げ、12年8月、BLG町田(当時はDAYS BLG!)を設立した。早速近くにあるホンダでの洗車をできないか、お願いしに行った。良い返事はもらえなかった。1年半通い詰めて、OKもらった。

6月中旬、この人は静岡県焼津市にいた。BLG加盟事業所の一つ、「BLGやいづ(デイサービスごんべえ)」の視察と研修のためだ。おばあちゃんらともじっくり話した後、スタッフ12人に向け研修を行った。

すべては行動から始まる。この人の人生を見ると、そう感じる。「理念先行でなく、実践を広めていかないと」。100BLGの今後が楽しみだ。

「大きな岩も少しは動く。そのうち小さな岩に」

•



「BLGやいづ」での研修。「ハードルを下げ、まずやってみて」「5分手を止め、メンバーさんの話を聞いてみて」と語る＝静岡県焼津市

•

——元々、福祉の道を目指されていたのですか？

いいえ、福祉や介護に対し、元々良いイメージは持っていませんでした。ところが大学時代に語学留学した体験が、いまにつながります。ホストファーザーが、車いすの販売をしていたんです。その姿が純粹に「カッコいい」と思い、医療ソーシャルワーカーの道を選びました。

——現実はいかがでしたか？

違いました。就職した病院で、車いすのおじいちゃんは、両手をひもで手すりにくられ、抑制帯で体を車いすに固定されていました。あまりにつらそうだったので、ひもを

解いてあげたんです。喜ばれました。でも、病院の規則を破ったため、総婦長に叱られ、別の事業所に異動を命じられました。

■日常生活の延長線

——その後、町田市在宅福祉サービス公社(当時)に転職、デイサービス管理者になります。

自分の好きなようにできる、と思いました。しかし、ベテランのスタッフは「立たないでください」「危ない」という言葉の拘束が強かった。密閉された空間で決められたことをやるのは違うな、と感じました。そこで地域とのつながりを作りました。お年寄りだけでやっていた風船バレーを、保育園へ出かけ園児たちとやるようにしたのです。盛り上がりましたね。

僕は、「日常生活の延長線」というのを大事にやってきました。でも、ベテランのスタッフたちは、リスクを恐れます。かなり意見を言い合いました。結果、70%は辞めました。

——そのうち認知症当事者から「働きたい」という声が出てきたのですよね？

はい、何とかその気持ちを生かしたいと思い、公社の古民家の営繕や改修をやりました。そのうち聞きつけた利用者さんが、「私も働きたい」。そこで、デイサービス内に「工務店」というグループをつくりました。風船バレーでつながっていた保育園の砂場の掘り起こしなど、新しい仕事を見つけました。みんな喜んでやっていたのですが、そのうち「対価がほしい」という声が出てきたのです。

——厚生労働省に5年通って有償ボランティアを認めさせ、ホンダ販売店に1年半通って、洗車の仕事を射止めました。原動力はどこから来るのですか？

若かったからです(笑)。今ならもう少し違う方法を考えます。当時は怖いものはなかったですから。厚労省やホンダに、メンバーさんと一緒に行って、うちひしがれて帰ってきて、でもメンバーさんを目の前に話をすると、「何とかしないと」と思う。「もう一度頑張らないと」という思いが芽生えるんです。

ホンダさんの場合は、当事者や家族、医療・介護関係者や研究者ら認知症に関わっている人数を「3千万人」と提示しました。その1%でも心が動けば、ホンダさんにもメリットがありますよ、などと交渉しました。

——なぜ100BLGを立ち上げたのですか？

以前、新潟から「BLG町田に通いたい」という人がいました。ありがたいですが、自分の住んでいる近くにあるべきです。町田のようなハブ機能を持った拠点が周囲にできることで、地域が変わり、人が変わった経験を目の当たりにしてきました。そうであれば、全国に100カ所BLGをつくろう、となったわけです。1000だと多すぎてコントロールが利かなくなるし、10だと少ない。100だと日本社会全体が変わって見えてくるだろうと思ったのです。

——焼津のBLG事業所で丁寧に視察・研修をされていましたね。

お茶の時間を見させてもらいました。おばあちゃんや、おじいちゃんの話じっくり聞き、何をしたいかを聞きました。スタッフの動き方をじっくり見させてもらいました。そして、その結果をふまえ、スタッフの集合研修を実施しました。焼津の施設は、まだ地域とのつながりが弱い。「できることから始めよう」とアドバイスしました。

■仲間がいるから

——上智大の学生とも交流されていました。

若い学生が将来社会に出たとき、(認知症への偏見という)大きな岩を少しずつでも動かすことができたら、と思います。認知症当事者との交流は、彼ら彼女らのターニングポイントになったはず。「あのとき聞いた話はこうだった」というようになれば、大きな岩でも少しは動く。そのうちに、小さな岩になるかもしれない。手で持ち上がるようになるかもしれない。

——町田での活動が全国に広がればいいですね。

そうですね。ただ、町田の活動がすべてではありません。それぞれの地域に合った、社会との連携があると思います。たとえば、BLG八王子は、イトーヨーカドーと提携し、高齢者らにとって買い物をしやすい環境をつくろうとしています。

あとは働くこと自体が目的ではない、ということです。あくまで手段。みんな「仲間がいるから来る」といいます。仲間がいて社会とつながれる、それこそが、目的です。

■プロフィール

★1976年、神奈川県藤沢市に生まれる。

★中高時代は、ハンドボール部の部長を務める。

★95年、江戸川大学社会学部に入学。ニュージーランドへ留学。

★2000年、板橋中央総合病院へ入職後、鶴川サナトリウム病院に異動。医療相談室などを経て、町田市在宅福祉サービス公社(当時)へ転職。そこでデイサービスの管理者に。

★12年、「NPO法人町田市つながりの開」を設立した後、「DAYS BLG!」を立ち上げる。写真は立ち上げ時の仲間と(本人は左端)。

★19年、「100BLG株式会社」を設立。

★「BLG!」には、日々の生活に困難を感じる場面や場所、それら社会環境が障害(Barriers)であり、生きにくさを感じている人たちが集い(Gathering)、発信(!)していくことで、生活(Life)しやすい社会をつくっていくという意味が込められている。

★趣味は映画鑑賞とアウトドア。